

## アラブ系譜学における母祖の提供と系譜統合

高野 太 輔

## はじめに

ヒシャーム・ブン・アルカルビー Hishām b. al-Kalbi の『大系譜書 (*Kitāb al-Nasab al-Kabir*)』を始めとする各種のアラブ系譜学書には<sup>1)</sup>、男児を産んだ母親の系譜が合わせて紹介されていることが多い。例えば、クライシュ (Quraysh) 族の祖先にあたるナドル・ブン・キナーナ al-Naḍr b. Kinānah という人物の場合<sup>2)</sup>、その母親はタミーム (Tamīm) 族の名祖タミーム・ブン・ムッル Tamīm b. Murr の姉妹であったという事になっている。

[1] キナーナは、以下の息子を儲けた。ナドル (本名はカイス), ヌダイル Nuḍayr, マーリク Mālik, ミルカーン Milkān, アーミル 'Āmir, アムル 'Amr, ハーリス al-Ḥārith, アルワーン 'Arwān, サアド Sa'd, アウフ 'Awf, ガンム Ghanm, マフラマ Makhramah, ジャルワル Jarwal。いずれも、キナーナの息子達である。彼らの母は、タミーム・ブン・ムッルの姉妹, バッラ・ビント・ムッル Barraḥ bt. Murr である。彼は、父フザイマ Khuzaymah から彼女を相続した<sup>3)</sup>。[*Kalbi*-I: 21]

- 
- 1) 本稿が扱うアラブの系譜学 ('ilm al-nasab) とは、アラブ諸集団の系譜伝承を網羅的に収集・整理し、様々な個人の出自を明らかにすると同時に、アラブ民族の総合的な系譜体系を構築しようとした学問を指す。アラブの系譜学に関しては、拙稿「アラブ系譜学の誕生と発展」, 「ラビア族の系譜操作に関する一試論」, 「カビーラの階層構造——アラブ系譜集団の分岐法について」を参照せよ [高野 2006; 1999; 2001]。
- 2) クライシュ族の「クライシュ」が何を指すかに関しては様々な説があり、①父祖の名前ではなく集団の名称に過ぎないという説、②クライシュ・ブン・バドル・ブン・ヤフルド・ブン・アルハリス・ブン・ヤフルド・ブン・アンナドル・ブン・キナーナ Quraysh b. Badr b. Yakhlud b. al-Ḥārith b. Yakhlud b. al-Naḍr b. Kinānah という人物の名前から来ているという説、③ナドル・ブン・キナーナにまつわる故事から来ているという説、④ナドル・ブン・キナーナ自身の渾名がクライシュだったという説、⑤クサイイ・ブン・キラブ Quṣayy b. Kilāb の時代になって始めて使われ出した集団名であるという説、などがタバリーの年代記に紹介されている [Tabari, I: 1103-5]。また、預言者ムハンマドから数えて 11 代前のフィフル・ブン・マーリク Fihir b. Mālik をクライシュと見なす考え方もあり [Muṣ'ab: 12; Hishām: 60]、後代にはこの説が広く流布するようになった。
- 3) バッラはまずフザイマ・ブン・ムドリカと結婚してアサド Asad (アサド族の名祖) らを儲けた。従って、キナーナとバッラは血の繋がらない義理の母子という事になる (キナーナ自身の母親はカイス・アイラーン族の出身)。このような相続による婚姻をマクト (al-maqt) 婚と呼ぶが、イスラム時代に入ってから『コーラン』(4: 22) の規定によって禁止された。キナーナ族の構成については、医王 2001 を参照せよ。

こうした形で母祖の名前が記録されているのは、第一に、母系の血縁による集団間の近親関係を強調するためであると考えられてきた。例えば、[1]に挙げたバツラとナドルの母子関係に関しては、イブン・ヒシャーム Ibn Hishām の『預言者伝 (*al-Sirah al-Nabawiyah*)』に、次のような逸話が出ている。

[2] ナドルとマーリクとミルカーンの母は、バツラ・ビント・ムッルである。……クライブ・ブン・ヤルブーウ・ブン・ハンザラ・ブン・マーリク・ブン・ザイド・マナート・ブン・タミーム (Kulayb b. Yarbū' b. Ḥaṇṣalah b. Mālik b. Zayd Manāh b. Tamīm) 族出身のジャーリール・ブン・アティーヤ Jarīr b. 'Aṭīyah<sup>4)</sup> は、ヒシャーム・ブン・アブド・アルマリク・ブン・マルワーン Hishām b. 'Abd al-Malik b. Marwān<sup>5)</sup> を誉め称えて、詩を詠んだ。

クライシュを産んだその母は、  
素性卑しき者でも、石女でもない。  
汝等の父祖ほど血筋の良き祖先はおらず、  
タミームほど高貴なる母方の叔父もいない。

この詩句は、ナドルの母であるバツラ・ビント・ムッルが、タミーム・ブン・ムッルの姉妹に当たることを指している。[*Hishām*: 60]

つまり、詩人ジャーリールはクライシュ族を誉め称える詩の中で、自分の属するタミーム族がクライシュ族と姻戚関係にあることを強調しているのである。このケースの場合、両集団の関係は図1のようになるため、タミーム族はクライシュ族にとって「母方のオジの一族 (banū al-khāl)」にあたる。一方、アサド (Asad) 族のような位置にある集団の場合には、「父方のオジの一族 (banū al-'amm)」と呼ばれる<sup>6)</sup>。イスラム時代前後のアラブ社会では、父系の出自に基づく近親関係を示せない場合、「母方のオジの一族」を名乗ることが、血縁的紐帯を主張する有力な根拠となったのである。

系譜学研究の大家である W・カスケルは、『大系譜書』に記された夫婦関係の多くが、異なる系譜集団の出身者同士を結びつけた事例から構成されている事実を指摘し、それらの母祖伝承が成立したのは、「彼女らが常に他部族出身である点から見て、恐らく、アラブ諸部

4) ウマイヤ朝時代を代表する詩人の一人で、同じタミーム族のファラズダク al-Farazdaq との間に戦わされた激しい風刺詩の応酬で知られる (110/728年頃没)。The *Encyclopaedia of Islam* (以下 *EI*<sup>2</sup>), New ed., "DJARĪR" を参照せよ。

5) ウマイヤ朝第10代カリフ (位 105-25/724-43年)。

6) 「オジの一族」という考え方は、両親の兄弟ばかりでなく、祖父や曾祖父など父系の祖先から見た両親の兄弟を全て含む。例えば、10代前の父祖の母親の兄弟は、やはり「母方のオジの一族」である。夫による「通い婚」が多かったジャーヒリーヤ時代のアラビア半島では、生まれた息子が母の一族に育てられるケースも多く、「母方のオジの一族」は個人の血縁的ネットワークを構成する重要な因子の1つであったと考えられている。『大系譜書』に見られる母祖伝承の一部は、このような考え方を集団間の関係にまで拡大したものと解釈できよう。

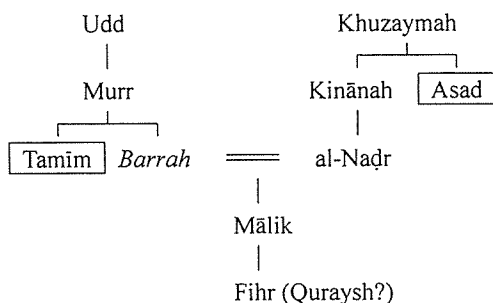


図1 オジの一族

族間の結束を強めるためであろう (um die Solidarität zwischen den arabischen Stämmen zu stärken)』との見解を示している [Caskel, vol. 1 : 53]。つまり、系譜学書に記された婚姻情報は後代に創作されたものであり、母系の血筋によって複数の集団を結びつけようとする、政治的な意図の下で生み出されたと考えるのである。

しかし、アラブの系譜学書に含まれる

莫大な量の母祖伝承は、その全てが本当に集団間の近親関係を強調するために記されたものだったのだろうか。確かに、上に挙げたバツラ・ビント・ムルの事例は、ジャーイルの詩が如実に示している通り、タミーム族がクライシュ族（つまり預言者ムハンマドの一族）との血縁的な繋がりを主張するために持ち出したものと見る事も可能である。ところが、ヒシャーム・ブン・アルカルビーの『大系譜書』に記録された1,200件以上の婚姻関係を分析してみると、そのような合理的理由によって解釈できるものばかりではないことが分かる。

例えば、カイス・アイラーン (Qays 'Aylān) 族の下位集団であるガタファーン (Ghaṭafān) 族の場合、ラビーア (Rabi'ah) 族の下位集団であるバクル・ブン・ワイル (Bakr b. Wā'il) 族から多くの妻を得たことになっているが、この両集団はウマイヤ朝時代のイラク地方で最も先鋭的に対立していた二大陣営の敵同士であり、母系による近親関係を主張しなければならない理由が見当たらない。また、同じくカイス・アイラーン族の下位集団であるハワズィン (Hawāzin) 族の場合、彼らの息子を産んだとされている女の出身集団は世代ごとにバラバラであり、その全てに対して近親関係が主張されているとも考えにくい。

それならば、これらの婚姻情報は何のために記録され、どういう目的で主張されたのだろうか。そもそも「目的」などといった作為は始めから存在せず、実際に子供を儲けた（と信じられていた）男女の系譜を忠実に記録したに過ぎないのだろうか。本稿では、主としてヒシャーム・ブン・アルカルビーの『大系譜書』に記録された婚姻情報の内容を分析し<sup>7)</sup>、そ

7) ヒシャーム・ブン・アルカルビーは、は、アッバース朝時代中期のクーファ (al-Kūfah) で活躍した系譜学者およびジャーヒーリーヤ学者 (204/819年没)。彼の著した系譜学書は2系統の写本によって現存しており、*Kalbi-1* は北アラブ系の全集団およびアンサールの一部について、*Kalbi-2* は南アラブ系の全集団 (クダア族を含む) およびラビーア族についての系譜体系を説明している。本稿では、両者を併せて『大系譜書』と呼ぶことにする。この史料の詳細については、拙稿「アラブ系譜学の誕生と発展」を参照せよ [高野 2006]。

の背景に何らかの人為的な構造——つまり、これまでに知られてこなかったアラブ系譜体系の生成原理を発見できないかどうか、探ってみる事にしたい。

## I 連続的な母祖の提供

『大系譜書』に記された婚姻関係の内容を個々に分析してみると、ある集団の構成員が、代々に渡って特定の集団から妻の提供を受けているというケースが観察される。例として、先に述べたガタファーン族とバクル・ブン・ワイル族の婚姻関係の内訳を見てみよう。

[3] ガタファーンは以下の息子を儲けた。ライス Rayth, アブドッラー ‘Abdallāh……。彼らの母親は、ウサイラ・ビント・ウカーバ・ブン・サアブ・ブン・アリー・ブン・バクル・ブン・ワイル Usaylah bt. ‘Ukābah b. Ṣa‘b b. ‘Alī b. Bakr b. Wā’il である。ライスは以下の息子を儲けた。バギード Baghid, アシュジャア Ashja’, ハルブ Ḥarb, アフワン Ahwan……, マーズィン・ブン・ライス Māzin b. Rayth……。彼らの母親は、ライタ・ビント・ルジャイム・ブン・サアブ・ブン・アリー・ブン・バクル・ブン・ワイル Rayṭah bt. Lujaym b. Ṣa‘b b. ‘Alī b. Bakr b. Wā’il である。バギードは、以下の息子を儲けた。ズブヤーン Dhubyān, アンマール Anmār, アーミル ‘Āmir。彼らの母親は、ムファッダー・ビント・サアラバ・ブン・ウカーバ al-Mufaddāh bt. Tha‘labah b. ‘Ukābah である。アブス ‘Abs。彼の母親はダハーム Ḍakhām である。彼女の本名は、ハシュナー・ビント・ワバラ・ブン・タグリブ・ブン・フルワーン・ブン・イムラーン・ブン・アルハーフ・ブン・クダーア al-Khashnā’ bt. Wabarah b. Taghlib b. Ḥulwān b. ‘Imrān b. al-Ḥāf b. Quḍā’ah である…。ズブヤーンは以下の息子を儲けた。サアド Sa‘d, ファザーラ Fazārah, ハーリヤ Hāriyah……, アーミル ‘Āmir……, サラーマン・ブン・ズブヤーン Salāmān b. Dhubyān……。彼らの母親は、ヒンド・ビント・アルアウカス・ブン・ルジャイム Hind bt. al-Awqaṣ b. Lujaym である。[Kalbi-1: 414-5]

図2を見れば分かる通り、ガタファーン族の基本軸を構成するズブヤーンの血統では、代々の男性がバクル・ブン・ワイル族から女性の提供を受け、次の世代の息子を儲けている様子が観察される(図2)。

それでは、上記の婚姻関係において一方的に女性を供出しているバクル・ブン・ワイル族の方は、何処から妻を得ているのだろうか。つまり、両集団の婚姻関係は、互いに女性を提供し合う双方向的なものなのだろうか。そこで、図2に示したバクル・ブン・ワイル族の男性と結ばれている女性の出身集団を調べてみると、意外な事実が明らかとなった。

[4] バクル・ブン・ワイルは以下の息子を儲けた。アリー ‘Alī, ヤシュクル Yashkur, バダン Badan……。彼らの母親は、ヒンド・ビント・タミーム Hind bt. Tamīm である。アリー・ブン・バクルは、以下の息子を儲けた。サアブ Ṣa‘b, ダフル Dahr, シャ

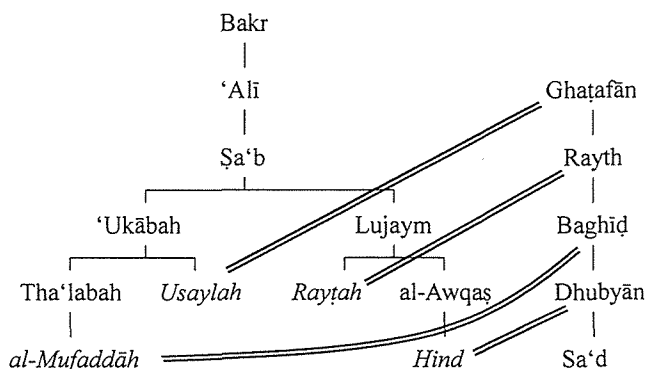


図2 ガタファーン族とバクル・ブン・ワーイル族の婚姻関係  
斜体は女性を表す（以下の図も同じ）

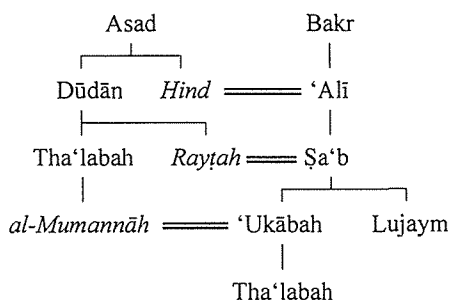


図3 バクル族とアサド族の婚姻関係

フル Shahr, ハーリド Khālid……。彼らの母親は、ヒンド・ビント・アサド・ブン・フザイマ Hind bt. Asad b. Khuzaymah である。サアブ・ブン・アリーは、以下の息子を儲けた。ウカーバ 'Ukābah, ルジャイム Lujaym, ムアーウィヤ Mu'āwiyah……, シャーヒド al-Shāhid……, ヌジュム Nujm……, アムル 'Amr……。彼らの母親は、ライタ・ビント・

ドゥーダーン・ブン・アサド・ブン・フザイマ Rayṭah bt. Dūdān b. Asad b. Khuzaymah である……。ウカーバ・ブン・サアブは、以下の息子を儲けた。サアラバ Tha'labah (別名ヒスン al-Hiṣn), カイス・ブン・ウカーバ Qays b. 'Ukābah……, アーミル・ブン・ウカーバ 'Āmir b. 'Ukābah……。彼らの母親は、ムマンナー・ビント・サアラバ・ブン・ドゥーダーン・ブン・アサド al-Mumannāh bt. Tha'labah b. Dūdān b. Asad である。[Kalbi-1 : 486-7]

図3が示す通り、バクル・ブン・ワーイル族の方は、イルヤース系のアサド族から連続的に女性の提供を受けていたのである（図3）。

これらの母祖伝承が、母系の血筋による近親関係を主張するために成立したという可能性は、非常に低い。冒頭でも触れた通り、ウマイヤ朝時代の各ミスル (miṣr) では、カイス・アイラーン族、アサド族、タミーム族などから構成されるムダル (Muḍar) 陣営と、アズド (al-Azd) 族、ラビーア族、クダーア (Quḍā'ah) 族などから構成されるヤマン (al-Yaman)

陣営とが対立状態にあり、しばしば激しい内乱を巻き起こした<sup>8)</sup>。クダア族という集団が、ニザール・ブン・マアッド Nizār b. Ma'add の兄弟からヒムヤル Himyar の子孫へと系譜を組み替えた理由も、このような政治的対立にあったと考えられている<sup>9)</sup>。従って、ムダル陣営に属していたガタファーン族と、ヤマン陣営に属していたバクル・ブン・ワーイル族とは、それぞれ互いに敵対していた集団同士ということになり、両者の間で政治的結束を強化せねばならない積極的な理由は、全く見当たらない。これは、ヤマン陣営に属していたバクル・ブン・ワーイル族と、ムダル陣営に属していたアサド族との関係についても、同じことである。それでは、上記のような母祖伝承が成立した理由は、何処にあるのだろうか。

## II 提供された母祖の出現位置

ここで注目したいのは、このようなタイプの母祖が出現する系図上の位置についてである。まず、バクル・ブン・ワーイル族から連続して母親の提供を受けているガタファーン族の人々を図4に示した。この図に現れた通り、バクル・ブン・ワーイル族の女性から生まれているのは、ガタファーン族の主要な下位集団を繋ぐ血縁の要に位置している人々（ライス、バギード、ズブヤーン、サアド）である。

論者は「カビーラの階層構造——アラブ系譜集団の分岐法について」において、南アラブの系譜体系は複数の系譜集団が同世代で一挙に分岐する〈等位構造〉を持つのに対し、北アラブの系譜体系では1本の系譜軸から世代ごとに1つの系譜集団が分岐していく

〈階層構造〉を持つ事が多いという事実を指摘した。更に、そのような北アラブの〈階層構造〉は、それまで個別に伝えられていた下位集団の系譜群を階層状に積み上げる事によって成立したのではないか、という仮説も提示しておいた [高野 2001]。

複数の系譜集団を階層状に積み上げるためには、基本軸を構成する各世代の父祖を新たに設定しなければならない (図5)。

これをガタファーン族の例に当てはめて考えてみると、どうなるであろうか。この集団の系譜構造が、アブドラー族、アシュジャア族、アブス族、ファザーラ族、サアラバ族、ムッ

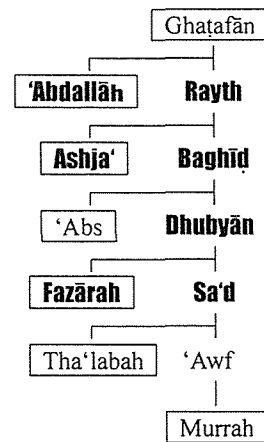


図4 ガタファーン族の「結節点」  
□ は主要な下位集団の名祖、太字はバクル・ブン・ワーイル族の母を持つ者

8) ムダルとヤマンの抗争に関しては、余部 1990; 高野 1996 などを参照せよ。

9) クダア族の系譜移動については、Smith 1907: 283-9; Caskel, vol. 2: 34; 余部 1990 や EP, "KUDĀ'A" などを参照せよ。

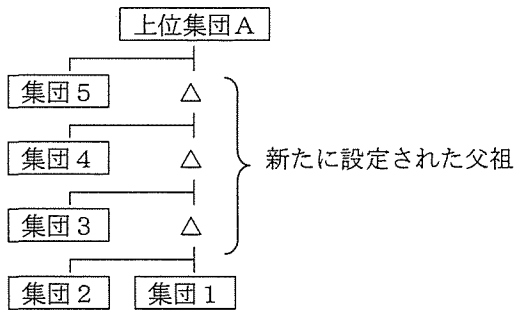


図5 系譜集団の階層的統合

ラ族の6集団を人為的に統合することによって作り出されたのだとすれば、その基本軸上に置かれているライス、バギード、ズブヤーン、サアドの4人は、下位集団の名祖同士を結びつける目的で新たに挿入された父祖ということになる<sup>10)</sup>。注目すべきなのは、この「結節点」に位置する4人が、バクル・ブン・ワーイル族から連続して母親の提供を受けている人物と一致する、という事実である。

下位集団を結びつける位置に置かれた人々が、連続してバクル・ブン・ワーイル族の女性から生まれているということは、彼らの存在を導入することによってガタフェーン族の系譜が統合されたとき、その母祖を相手の集団から一斉に拝借した可能性が高いとは考えられないだろうか。つまり、このようなタイプの母祖伝承は、新しく組み込まれた「結節点」の母祖を確定するときに、他の集団から機械的に女性を取り出す事によって（より正確に言えば、作り出す事によって）成立したと推測できるのである。

この仮説を、もう一つの事例であるバクル・ブン・ワーイル族のケースで検証してみたい。バクル・ブン・ワーイル族の下位集団は、シャイバーン (Shaybān) 族、タイムッラー (Taymallāh) 族、カイス (Qays) 族、ズフル (Dhuhl) 族の4つが、いずれもサアラバを父に持つ兄弟集団として〈等位構造〉の下に置かれている。ルジャイムを父とするイジュール (ʿIjl) 族とハニーファ (Ḥanīfah) 族についても、同様である。従って、前者をサアラバ族、後者をルジャイム族というブロックとして考えれば、バクル・ブン・ワーイル族の系譜構造は、ガタフェーン族によく似た〈階層構造〉を持つ事になる。この場合、基本軸を形成する「結節点」は、アリー、サアブ、ウカーバの3代となるが、前節で見た通り<sup>11)</sup>、この3人はアサド族から連続して妻の提供を受けている人物に一致する<sup>12)</sup> (図6)。但し、ガタフェー

10) ムッラ族やファザーラ族は、ズブヤーン族という枠組で史料に登場する事も多い。このようなケースの場合は、全く架空の存在を「結節点」として創出したわけではなく、もともと集団名だったものを父祖の名前として利用したか、系譜関係の曖昧だった伝説的な父祖の名前を流用したと見るのが妥当であろう。

11) [4] では訳出しなかったが、ルジャイム・ブン・サアブの妻はサフィーヤ・ビント・カーヒル・ブン・アサド Ṣafīyah bt. Kāhil b. Asad となっている [Kalbi-1: 538]。

12) 『大系譜書』においてキングダ族の系譜を説明した箇所の中に、ラビーア・ブン・ムアーウィヤ Rabi'ah b. Mu'awiyah b. al-Ḥārith b. Mu'awiyah b. al-Ḥārith b. Mu'awiyah b. Thawr なる人物の妻として、ズハイラ・ビント・アムル・ブン・シャイバーン・ブン・ズフル・ブン・サアラバ・ブン・バクル・ブン・ワーイル Zuhayrah bt. 'Amr b. Shaybān b. Dhuhl b. Tha'labah b. Bakr b. Wā'il という人名が登場する [Kalbi-2: 139]。バクルの直前の「ブン」が前置詞「ミン (min)」の誤記でないと仮定すれば、これはアリー、サアブ、ウカーバの三代が挿入される以前の、古い系譜構造の痕跡と見る事が可能であろう。

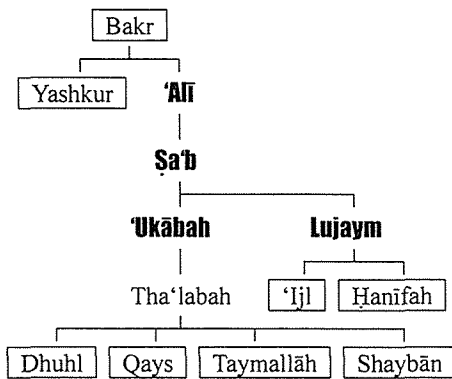


図6 バクル・ブン・ワーイル族の「結節点」  
□ は主要な下位集団の名祖，太字はアサド族の妻を持つ者

母祖を設定しようとして生まれた、と解釈する方が合理的である<sup>14)</sup>。

この解釈を支持する間接的な証拠は、実を言うと、南アラブの系譜体系の中に存在する。前述の通り、南アラブの系譜体系は複数の系譜集団が一挙に分岐する〈等位構造〉を基本としており、北アラブのような〈階層構造〉は殆ど観察されない。そして、*Kalbi-2* に記された南アラブ出身の男性に関する 400 件以上の婚姻情報の中には、3 代続けて同一の異集団から女性を提供されるというケースが、一つも存在しないのである<sup>15)</sup>。これは、南アラブの系譜体系が〈等位構造〉を原則として構成されているため、複数の集団を階層状に積み上げる作業——つまり、基本軸上の父祖を新たに設定する過程を経験しておらず、妻となる女性を他集団から一斉に拝借する必要が無かったからに他ならない。

この考え方を逆に応用すると、アラブ系譜体系の中で「連続的な母祖の提供」が現れる箇所については、その婚姻の内容のみならず、夫側の集団において父系の系譜そのものが人為的かつ集中的に改変（もしくは創作）されている可能性が高い、という事になる。以上の発想に基づいて北アラブの系譜体系を精査した結果、次のような発見を得る事が出来た。

13) この違いが何を意味するのか、現時点では判然としない。ガタフェーン自身の妻が未定だったのに対し、バクル・ブン・ワーイルに関してはヒンド・ビント・タミームを妻とする伝承が先行して存在した可能性もある。

14) この解釈に従うと、ガタフェーン族の相手としてバクル・ブン・ワーイル族が、バクル・ブン・ワーイル族の相手としてアサド族が選ばれた理由は何かという疑問が生じる。この“母祖の出身集団の選択”に関する問題については、本稿の末尾に記した「母祖」の役割をめぐる議論と合わせて、次の機会に詳しく論述する予定である。

15) *Kalbi-1* に記載された北アラブ出身の男性に関する婚姻情報は約 800 件、*Kalbi-2* に記載された南アラブ出身の男性に関する婚姻情報（ラビーア族を含まず、クダーア族を含む）は約 400 件ある。

ン族の場合は「結節点」の人々がバクル・ブン・ワーイル族の女性を母親としているが、バクル・ブン・ワーイル族の場合にはアサド族の女性を妻としているのが相違点である<sup>13)</sup>。

以上の事実を手がかりとして考えると、『大系譜書』に現れた「連続的な母祖の提供」という現象は、双方の集団を母系の血縁によって結びつけたものというよりも、複数の下位集団を階層的に統合して大集団の系譜構造を確定したとき、基本軸上の「結節点」に



## III ラビーア族の統合過程

論者は「ラビーア族の系譜操作に関する一試論」において、北アラブを構成する大系統の一つであるラビーア族の系譜構造が、バクル・ブン・ワーイル族やタグリブ族といった下位集団の系譜群をブロックとして組み立てられている事を実証した [高野 1999]。しかし、ラビーア族の系譜全体が、いかなる順序と論理に従って現在の形に整理されたのか、具体的な過程は不明のままであった。

そこで注目したいのは、ラビーア族の基本軸上に配置された人々の母親である。ラビーア族の系譜構造は、図7のように間延びした階層構造を形成しており、バクルとタグリブに至る血統が基本軸になっている。

以下に挙げるのは、この基本軸に当たる部分を説明した *Kalbi-1* の記述の一部である。

- [5] ジャディーラ・ブン・アサド *Jadilah b. Asad* は、以下の息子を儲けた。ドゥウミー *Du'mī*、ジュダイイ *Judayy*……、ジャッダーン・ブン・ジャディーラ *Jaddān b. Jadilah* ……。彼らの母親は、ビント・ドゥウミー・ブン・イヤード *Bint Du'mī b. Iyād* である。ドゥウミー・ブン・ジャディーラは、以下の息子を儲けた。アフサー *Afṣā*、アシュヤブ *Ashyab*。二人の母親は、ビント・アフサー・ブン・ドゥウミー・ブン・イヤード・ブン・ニザール *Bint Afṣā b. Du'mī b. Iyād b. Nizār* である。アフサー・ブン・ドゥウミーは、以下の息子を儲けた。ヒンブ *Hinb*、ルカイズ *Lukayz*、シャン *Shann*……、アブド・アルカイス *'Abd al-Qays*、ジュシャム *Jusham*……、ナーシム・ブン・アフサー *Nāshim b. Afṣā*……。彼らの母親は、ムライカ・ビント・ヤクドゥム・ブン・アフサー・ブン・ドゥウミー・ブン・イヤード *Mulaykah bt. Yaqдум b. Afṣā b. Du'mī b. Iyād* である。 [*Kalbi-1*: 484]

図8に示した通り、ラビーア族の基本軸上に配置されたドゥウミー、アフサー、ヒンブの3人は、全

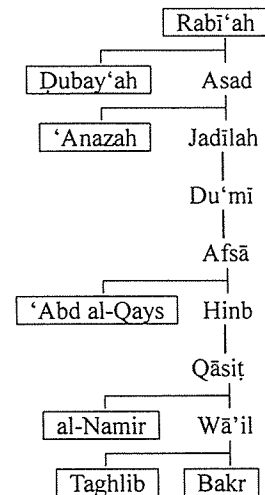


図7 ラビーア族の系譜構造  
□ は主要な下位集団の名祖

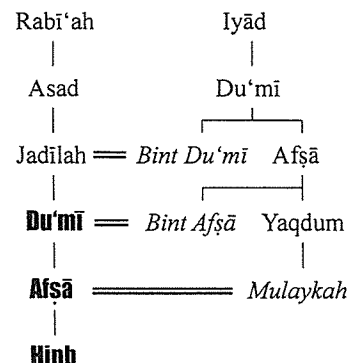


図8 ラビーア族の結節点の母(1)  
太字はイヤード族の母を持つ者

員がイヤード族の女性を母としており、単純な交叉イトコ婚が繰り返されている事が分かる(図8)。つまり、これら3世代の婚姻もまた、前節で見た「連続的な母祖の提供」と見なす事が出来るのである。

このような婚姻パターンが、父系の系譜の中へ新たな人物を挿入したときに現れるものだとすれば、これらイヤード族の女性から生まれた3人は、ラビーア族の系譜の中に後から挿入されたものということになる<sup>16)</sup>。そこで、彼ら3人の存在を系図中から除いてみたのが、図9である。その際、アフサーとヒンプの間で分岐しているアブド・アルカイス族は、そのままジャディーラとカースイトの間に残すものとする。

一見して分かる通り、この図に現れたラビーア族の系譜構造は、ガタフェーン族のものと全く同じ形——すなわち、6つの下位集団が世代ごとに分岐する典型的な〈階層構造〉を形成している。それでは、新たに現れたこの系図において、6つの下位集団を結びつける「結節点」に置かれた人々は、どのような母親から生まれた事になっているのであろうか。これを示したのが、次の図10である<sup>17)</sup>。

驚くべき事に、これらの「結節点」に置かれた人物は全て、クダア族出身の女性を母親としている事が判明した。これは、ガタフェーン族の「結節点」に置かれた人物が全て、バクル・ブン・ワーイル族出身の女性を母親にしているのと、全く同じ構造である。つまり、彼ら4人の存在が導入されてラビーア族という枠組の系譜構造が作り出され

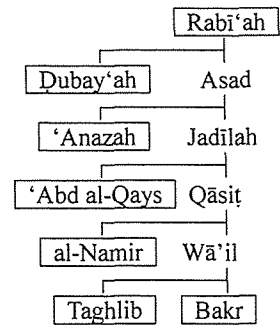


図9 圧縮されたラビーア族の系譜構造

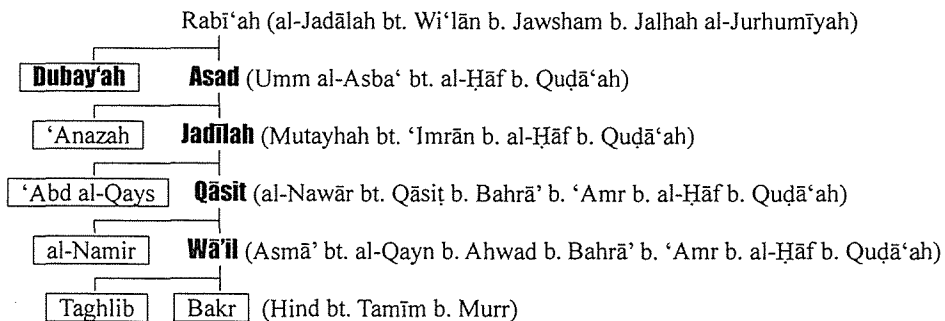


図10 ラビーア族の結節点の母(2)

( )内は母親の名前、太字はクダア族の母を持つ者

16) これらの婚姻では、ドゥウミーの母親がビント・ドゥウミー(つまりイヤード族の祖父の名がドゥウミー)、アフサーの母親がビント・アフサー(つまり祖父の名がアフサー)となっており、名前の付け方に安直な点が見受けられる。二人の女性が自分の父親の名を息子に付けたと解釈する事も可能であるが、いずれも本人のイスマが伝えられていないなど不審な点もあるため、機械的に女性を引っ張ってきた痕跡と見なす方が自然であろう。

17) 煩瑣になるため、訳文は省略した [Kalbi-1: 19-20, 483-5]。

たとき、基本軸上の人物にも母親を設定する必要が生じ、その出身集団を一括してクダーア族に求めたのではないかと考えられるのである。

従って、ラビーア族という集団の系譜構造は、まず最初に6つの下位集団を階層構造に並べ、その「結節点」の母親をクダーア族から一斉に拝借した。次いで、ジャディーラとカースィトの間に3代の人物が新たに挿入され、その母親をイヤード族から一斉に拝借した、という順番で整理されてきたと推定される。

イヤード族の母から生まれた3世代の人物が挿入された原因は判然としないが、ラビーア族の系統が他に比較して不自然に長い系譜を持っている理由——つまり、論者が「ラビーア族の系譜操作に関する一試論」で指摘した「4世代差」を生み出した原因の一つに、この3世代の挿入が絡んでいる事は間違いない<sup>18)</sup>。

## お わ り に

以上のように、『大系譜書』に記録されているアラブの母祖伝承には、必ずしも複数の集団を母系の血縁によって結びつけようとしたものばかりではなく、系譜体系を組み立てていく際の作業上の都合によって生じた例も含まれている事が明らかとなった。そこに現れた婚姻関係の内容は、特定集団から一斉に女性を取り出されている事からも分かるように、機械的かつ集中的な手順によって確定されたものである。従って、このようなタイプに属する系譜情報は、当該集団の出身者から採取された伝承によってではなく、系譜学者の意識的な情報操作によって作り出されたと思えるのが妥当であろう。本稿で見たような婚姻パターンが、非常に古い世代の血縁関係を説明している部分——つまり、各集団の名祖同士が結びつけられた系譜体系の上位に偏っている事も、その可能性を強く支持している。

但し、こうした婚姻関係が系譜学者の人為的な操作によって作り出されたものだとすると、一つの根本的な疑問が生ずる。ヒシャーム・ブン・アルカルビーを始めとする当時の系譜学者は、アラブの系譜体系を組み立てていくにあたって、なぜ「母親の確定」にこだわったのであろうか。イルヤースの妻ライラー・ヒンディフ Laylā Khindif や、アウス al-Aws とハズラジュ al-Khazraj の母カイラ Qaylah など、系譜学の発生以前に流布していた母祖伝承を整合的に組み込むための努力であれば、その必要性を容易に理解する事ができる。しかし、下位集団の系譜を統合する過程で生じた架空の父祖に対してまで、全く無名の女性を妻として準備し、系譜学書の中に記述しようとした動機は、何処にあったのだろうか。

---

18) バクル・ブン・ワーイル族やタグリブ族に属する男性の婚姻関係を見ると、彼らの絶対世代(アドナーンを1世代目として数えた世代数)が、他集団出身の相手女性よりも、一律に約4世代下位の方向へズレている。これは、両集団が他集団との婚姻関係を確定した後に、系譜体系の中を約4世代下位へ移動した痕跡であると考えられる [高野 1999]。

この問題を解決するためには、本稿で観察した婚姻パターンとは別種類の情報——例えば、一人の女性が次々と結婚を繰り返して異なる集団の男性と息子を儲けている事例や、特定の家系に属する複数の女性（姉妹など）がそれぞれ異なる集団の母祖となっている事例など——を含めて精査し、アラブの系譜学において「母祖」の存在が果たしていた役割を、総体的に考察してみなければならない。機会があれば、稿を改めて上記の問題を論ずる予定である。

## 参考文献

- Hishām* : Ibn Hishām. *Al-Sīrah al-Nabawiyah*, ed. F. Wüstenfeld, 2 vols. Göttingen, 1858–60.
- Kalbī-1* : Hishām b. al-Kalbī. *Jamharah al-Nasab*, ed. Bāji Ḥasan. Beirut, 1986.
- Kalbī-2* : ——. *Nasab Ma'add wal-Yaman al-Kabīr*, ed. Bāji Ḥasan, 2 vols. Beirut, 1988.
- Muṣ'ab* : al-Muṣ'ab al-Zubayrī. *Kitāb Nasab Quraysh*, ed. E. Levi-Provençal. Cairo, n. d.
- Ṭabarī* : al-Ṭabarī. *Ta'rikh al-Rusul wal-Mulūk*, 15 vols. Leiden, 1879–1901.
- Caskel, W. (1966) *Ġamharat an-Nasab : das Genealogische Werk des Hišām Ibn Muḥammad al-Kalbī*, 2 vols. Leiden.
- Smith, W. R. (1907) *Kinship & Marriage in Early Arabia*, New edition. London.
- 余部福三 (1990) ウマイヤ朝期のシリアにおけるカイスとヤマンの闘争について『人文自然科学論集〈東京経済大学〉』85, 1–32.
- 医王秀行 (2001) キナーナ族について：メッカ、巡礼行事との関わり『東京女学館短期大学紀要』24, 1–18.
- 高野太輔 (1996) ウマイヤ朝期イラク地方における軍事体制の形成と変容：シリア軍の東方進出問題をめぐって『史学雑誌』105 (3), 1–25.
- 高野太輔 (1999) ラビーア族の系譜操作に関する一試論『オリエント』41 (2), 38–60.
- 高野太輔 (2001) カビーラの階層構造：アラブ系譜集団の分岐法について『東洋学報』83 (2), 033–058.
- 高野太輔 (2006) アラブ系譜学の誕生と発展『大東文化大学紀要〈人文科学〉』44, 335–55.

(大東文化大学国際関係学部)